

新米弁護士七転び八起記

会員 岩田 朋子

1 はじめに

東京弁護士会には毎年約300名が新規登録を行う。「新人」弁護士の数自体が多い上に働く場所や取り扱う案件の内容によっても働き方は様々だと考えられる。一方「新人」としてどのようなことを考えていたかなど、共通する部分もあるのではと思い、一新人弁護士である私が、これまで数か月どのような試行錯誤の日々を送ってきたのか、日記形式で振り返らせていただきたい。

2 5月までの自分

1月某日：今日から仕事始め、頑張ろう—と思っていたら、知らず知らずのうちに心身ともに張り切り過ぎていたらしく、激しい腹痛に襲われ、朝から自宅の床の上を転げ回る。何とか事務所に行ってみる。顔色がかなり悪かったらしく、専ら体調を心配される。新年を波乱含みでスタートさせてしまった。

2月某日：周りの先輩方を見ていると、自分は弁護士としてこの先やっていけるのか、漠然とした不安に襲われる。東弁のネット研修を受けていても、いかに自分が理解できていないことが多いかを痛感する。「法曹も日々勉強の日々」との先輩弁護士のお言葉を思い出す。

3月某日：修習同期と数か月ぶりにばったり裁判所地下で再会。「帰宅は基本午前2時過ぎ」という話を聞いて、友人の体調が心配になる。他の同期と話していても、それぞれ色々な場面で苦心しているようだ。最近ようやく「先生」と呼ばれると、自分のことかもしれないと考えられるようになってきた。

4月某日：研修枠で初めての刑事事件を受任。事前研修も受け『新・実践刑事弁護 昇平弁護士奮闘記』もしっかり読み込んだ。意気揚々と接見場所の警察署に向かう。しかし不審者と思われたのか、「ご用件は」「身分証は」と入り口で尋ねられる。修習の時は指導担当の弁護士の後ろから入ったのですっかり油断していた。どことなく気が抜けた顔の写真を見られるのは恥ずかしいが、背に腹は代えられない。

5月某日：待ちにまった委員会活動に参加。自分が会員の一人であることを改めて実感できる機会だ。1月の段階では半年経てば少しずつ事件の対処方法も分かってくると思っていたけれど、全く違った。同じ種類の事件でも取り寄せる資料の内容が一緒でも進め方や取るべき手続の内容が全く違う。更に刑事事件も担当していると、日中は民事事件に取り組むので手一杯で接見は基本夜。就寝準備の時間を外すとすると、接見開始はスムーズにいった9時過ぎで、帰宅が1時近くになることも。このペースが1週間続くとやや堪える。仕事には体力が必要だということを感じた。

3 おわりに

ここ数か月弁護士として活動し、色々な方と接するにつれ、自分に足りないことのあまりの多さを痛感する。ただ、あらゆる方に支えていただいた上で試行錯誤を繰り返しながら全力で目の前の仕事に取り組んでいくという姿勢は今後も大事にしたい。今は数十年後この時を振り返ってみて「この仕事を続けてよかった」となるように日々邁進したい。